

日本語を母語としない高校生に対する支援 — ある高等学校の事例を通して —

齋藤 昭子

1 日本語を母語としない児童生徒に対する日本語教育の概況

「日本語を母語としない児童生徒」（以下「児童生徒」と称す）の増加にともない、「年少者日本語教育」の研究が盛んになってきているが、まだまだ学校現場で日本語教育の知見が活かされているとは言いがたい。その理由としては、学校に日本語教育の専門知識がある指導者がいない、学校現場と日本語教育の場の距離がある、行政側の対応の遅れなどさまざまな要因が考えられる。

日本語指導等の受入れ体制が整っているのは全国でもほんの一部の学校であり、多くの学校では受入れ体制がないまま「児童生徒」が入学し、日本語指導や適応指導等の対応に苦慮している状況である。文部科学省の「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査」（平成17年度）によると、日本語指導が必要な児童生徒の人数は20,692名である。その在籍人数別学校数は「1人」が最も多く、全体の47.1%を占める。その一方で「30人以上」在籍する学校も37.5%と前年度より増加しており、「分散と集中の二極化」という状況におかれている。従来の子年少者日本語教育の研究は、「児童生徒」が多数在籍している学校が取り上げられることが多かった。しかし、受け入れ体制の整っていない学校にある日突然「児童生徒」が入学し、即座に対応を求められるケースも多いものと思われる。

特に高等学校においては、小学校や中学校と比べて対応が遅れている状況である。また最近、児童生徒向けの日本語教材が開発されてきているが、その多くが小学校、中学校向けの内容であり、直ちに高等学校の生徒に応用できるものは少ない。成人向けの日本語教材で代用する、などの対策がとられているケースもあるが、その内容が青少年向けとしてそぐわないものもあり、また「学習言語」を伸長させる視点のある教材は現時点では見受けられない。

2 学校現場での問題（山形県の場合）

齋藤(2004)および齋藤(2005)における調査では、山形県の高等学校には「日本語を母語としない生徒」が2003年度には64名、2004年度には68名在籍していた。その中で日本語指導を受けている「日本語を母語としない生徒」（以下「生徒」と称す）の人数は、2003年度で12名、2004年度で7名となっている。さらに詳しく状況を調べると、次のような問題が見出された。

- ・日本語指導を受けていない生徒の中にも、「学習言語」という点で考えると指導が必要な生徒が含まれている可能性がある。
- ・学校側に日本語指導の専門知識がある教員がいないため、教科指導と日本語指導の連携がなされていない場合が多い。
- ・日本語指導に対する具体的な指針がないために、個々の指導者に任されていて、「生徒」に対する指導のあり方について、情報が共有されていない。
- ・その「生徒」にとって必要なのはどのような「日本語」であるか、その進路を見据えての吟味がまだなされていない。

3 研究の目的

高等学校の場合、小学校や中学校と比べるとその学校によってカリキュラム等指導内容の違いがある。しかしどの高等学校においても共通項として挙げられることは、「小学校、中学校より高度な学習レベルが要求される」「卒業後の進路が多岐にわたる」という点である。この2点、および2でまとめた問題をふまえ、高等学校における「生徒」に対する支援において重要なポイントを次の4点と考える。

1. 「学習言語」の伸長が視野に入っていること。
2. 教員に日本語教育に対する高度な知識がなくても指導可能であること。
3. 日本語指導者や教科指導者などの間で、日本語指導および教科指導に関する情報の共有がなされること。

4. 個々の生徒や学校の状況に応じた指導であること。特に、どのような日本語を指導すべきか、という点についてはその「生徒」の進路を見据えて考えていくこと。

特に高等学校の場合、各学校によって「生徒」が置かれている状況は様々で、その指導の内容はケース・バイ・ケースであると考えられがちである。しかし個々のケースは違っていても、それぞれの学校に合わせて上記の4点を指導上の指針として取り入れることは可能であるとする。どのケースにも共通する指導上の指針を設けることにより、指導者同士が共通の認識のもとに「生徒」を指導することができる。特に、特別な指導体制もないまま個々に手探りで指導がなされているような高等学校において、上記のような指針は重要である。

今回は、上記の4点の視点をふまえながら山形県のある高等学校の実践例を通して、日本語指導のあり方について考察を深めたい。

4 実践報告

ここでは山形県の県立A高等学校における実践例を報告し、日本語指導のあり方について考察する。

A高等学校には2005年度から2名の「生徒」が在籍している。A高等学校ではそれまで交換留学という形での短期留学生や聴講生が在籍していたことがあるが、外国から来た生徒が入学試験を受けて正規の生徒として入学した例はない。筆者はこの「生徒」たちに、主に教科担任の立場として関わってきた。また、これまでの研究に基づき、学校内で日本語指導のあり方について提言をしてきたつもりである。ここでは二人をめぐる日本語指導や教科指導の状況を報告し、考察を行う。

4-1 実践校と「生徒」の状況

A高等学校は在籍数が400名ほどの小規模校であり、卒業生の進路は進学と就職が半々となっている。総合学科のため、生徒が自分の進路志望を考えて多彩な科目の中から科目選択を行うことができる。また留学生や聴講生が在籍し

ていたり、地元の一般成人に対して聴講制度を設けていたりする等、学校全体として柔軟性があり、生徒一人一人の個性に応じた対応ができる雰囲気がある。ただし、前述のように外国から来た生徒に対して正規の生徒として受け入れた前例はなく、その指導体制もなかった。

その中に2005年4月に、2名の「生徒」（以下、BおよびCとする）が入学してきた。Bは2004年春に来日して山形県内の公立中学校に在籍し、1年間学習した。その際、日本語教師の指導を受け、高校入学の時には日常会話にはそれほど苦労しないレベルの日本語を身につけていた。Cは2004年秋に来日し、地域の日本語ボランティアの教室で学習していたが、A高等学校に入学した当時、基本的な日本語が定着していなかった。BとCの母語は同じであり、高校側では2名を同じクラスに在籍させた。

4-2 指導の経緯

最初は学校としての特別な指導体制がなかったため、筆者が空き時間に少しずつ日本語や教科の指導を行う形で始まった。そして入学して約二ヶ月経った5月末、二人にとって初めての中間テストが近づき、二人の気持ちにも不安が高まっただけでなく、教科指導をしている教員の側にもとまどいと不安の声が上がった。その結果、教務課主導という形で二人に対する指導や試験の方法について話し合いがもたれることになった。その場で授業の様子など情報や意見の交換が行われ、次のような事項が指導者側の共通認識として確認された。

- ・2名を特別扱いするというのではなく、他の生徒と同様に「その生徒にとって必要な支援」を行うこと
- ・上記の立場において、二人に対して必要な日本語や教科の指導を行うこと
- ・指導の際は誰かに過度の負担がかかるのではなく、教員がそれぞれ指導内容を分担して行うこと
- ・情報交換により情報の共有を図ること
- ・「学習言語」の伸長を視野に入れて指導すること

同時に外部から非常勤の日本語指導者に来校してもらうことになった。指導

を依頼したのは、日本語を母語としない児童への日本語指導の経験が豊富であり、なおかつ二人の母語を解する日本語教師である。その指導内容としては、「学習言語」の伸長という視点から、教科の内容を理解するための日本語を中心に据えることとなった。事前に学校側とその指導者との打ち合わせがもたれ、日本語指導者側から、「高校に入学した生徒についての日本語、科目の補習などは今まであまりなかったことであり、画期的である」との発言があった。

4-3 教科指導の実際（古典の場合）

筆者は2名の「国語総合」の教科担任として2005年4月から2006年3月までの1年間、指導を行った。「国語総合」の4単位のうち週2時間の古典分野を担当した。

授業のほかに、昼休みや放課後を利用して、主に授業内容の確認等の指導を行った。その指導にあたって考慮したことは次の2点である。

- ・二人は既に母語が確立しているので、学習の際に母語を利用させる。
- ・授業の前に予習させて内容を理解させ、授業中はわからない日本語の理解に集中できるという状態にする。

4-3-1 母語の利用

二人の母語が同じであったため、二人一緒に学習させてわからないところを母語で話し合うようにした。Cが理解できなかった言葉をBが母語で解説するという場面が頻繁に見られ、そのことによって学習効率が上がっただけでなく、Bにとって「母語による学習内容の確認」という作業に繋がったものと思われる。二人の母語での解釈が正しいのかという点については、筆者が二人の母語で簡単なやり取りができたため、特にキーワードになる語句についてはその都度確認をして、二人の理解がまちがっていないか確認した。

4-3-2 事前の予習

授業中には難しい日本語が出てきても単語の意味を調べる余裕がないので、特にキーワードになる単語については事前に母語での意味を確認させた。

高等学校においては、古典の初期の単元は簡単な物語などに口語訳が添えられている場合が多い。まず原文の前にこの口語訳の内容が理解できるように、意味を解釈していった。口語訳で使用されている日本語は、現代文の教材などと比べるとはるかに理解しやすく、口語訳と基本的な古語を押さえるだけでも内容の把握はできる。また、原文の意味をすべて理解できなくとも全文を音読させることによって、古典特有のリズムに慣れさせ、単語の切れ目を意識させることに努めた。

5 一学期の結果と考察

一学期の試験が終わり、古典分野に関しては二人とも他の生徒と遜色ない成績を修めることができた。二人は学習意欲が高く、理解力もあったので、他の科目についても全体的に良い成績を修めることができ、その結果だけを考えると二人の教科学習は順調に進んでいるように思われる。しかし、試験で良い成績を修めることが、はたして真の学力、日本語力を表していると言えるか疑問が残る。「難しい科目については、理解することは諦めて答えを暗記する」という発言もあった(B)。

中島(2003)では、外国籍の子供について、日常会話は2、3年、教室で教科学習に必要な口頭能力は4、5年、読み書きは8歳以上なら5～7年かかることがとりあげられている。二人の場合、高校生活に慣れるに従って次第に教師との意思の疎通も図られるようになり、また成績に関しても大きな問題はなかったが、二人とも日本の学校に入学してからまだ1～2年しか経過していないことを考えれば、全く問題がなくなったとは考えにくい。

そこで、二人の日本語力をより客観的に測る必要があると判断し、日本語指導者に協力をお願いして「JSLバンドスケール(注1)」による日本語力の測定を実施した。

6 JSLバンドスケール結果と考察

川上らによって開発された「JSLバンドスケール」は、「児童生徒」の日本

語力やその課題などについて、より客観的に測定し、日本語指導に役立てようというものである。小学校等を中心に実施されているが、近年では神奈川県立愛川高校で大規模に調査が行われるなど（注3）、高等学校でも実施の広がりを見せている。日本語の能力は、「読む・書く・話す・聞く」の4技能に分けて測定され、そのレベルは1～8までの数値で表される。数字が大きいほど能力が高いということになる。

- ・調査期間 2005年7月～8月
- ・調査者 日本語指導者および筆者
- ・調査方法 二人の授業の様子や指導中のやりとり、授業中回収した作文など

測定の結果(数値はレベル)

	聞く	話す	読む	書く
B	5－6	5－6	4－5	4－5
C	3	3	2－3	2－3

の文章などを参考にした。

それぞれの生徒について、4技能における日本語能力の特徴を簡単にまとめると次のようになる。

B

「聞く・話す」という技能については、身近な話題であればおよその内容を理解し、会話のやりとりができる。ただし、「読む・書く」という技能のレベルは「聞く・話す」という技能のレベルよりも低くなっている。文章をたくさん書くことはできるが、正確さに欠ける部分が生じる。

C

「聞く・話す」という技能については、最低限必要なやり取りはできるが、その際にはゆっくりとしたスピードで会話するなどの配慮が必要である。「読む・書く」のレベルはB同様「聞く・話す」よりも低くなっているが、日本語で学習する段階に入りつつあり日本語での学習は可能である。

以上、測定の結果から、4技能において、二人ともまだ日本語の支援が必要

な段階であり、「聞く・話す」という技能に比べて、「読む・書く」という技能のレベルが低いことから、特にこれらの力を伸ばさせる手だてが必要であると言える。

7 アンケート

二学期以降も引き続き教科指導と日本語指導が行われ、成績も良好であった。しかし、生徒自身の話を聞くと、教科によっては理解が難しいものがあり、不安は解消されていないようであった。そこで、次のような内容でアンケートをとり二人の意識調査を試みた。

- ・実施月日 2005年12月1日
- ・対象 BとC
- ・目的 生徒自身の意識を調査することによって課題がどこにあるか把握する。
- ・内容 「日本語の学習」「学校での日本語」「学校生活」についての意識調査（資料参照）

7-1 アンケート結果と考察

アンケートの結果から、「日本語の学習」「学校での日本語」「学校生活」の三点について、以下に考察する。

まず「日本語の学習」の難しい点について質問したところ、Bは「いろいろな言い方、流行語」が、Cは「文章の読み取り」が難しいと答えている。Bは「生活言語」は身につけていたため、日本語で積極的に教員と意思の疎通を図ることができていたが、日本人の友人と積極的に交流するような場面はあまり見られなかった。高校生特有の言い回しなどが理解しづらかったものと推測される。一方Cは簡単な会話であればできるようになっていることと、込み入った内容の用件についてはBが通訳のような役割を果たしていたので、大きな不安はなかったと思われるが、教科書の文章など自力で読み取らなければならないようなものは理解するのが難しいものと思われる。そのことは、「学校での日本語」

についてCが、「現代文」がわからない、また文章を理解したり自分の意見を述べたりするのがあまりできない、と回答していることからもうかがえる。

次に、「学校生活」については、Bは「ふつう」Cは「楽しい」と回答しており、特に大きな問題はなく学校生活に適応しているものと思われる。二人は同じ部活動に所属して活躍しており、学校祭においてもステージ発表を積極的に行うなど、充実した学校生活をおくっている。クラスにおいても、一般生徒と同じレベルでの交流は難しいようであるが、特にトラブルもなく受け入れられているように見える。

全体としては順調に学校生活を送っている様子がかがえたが、「学校生活について、困っていることや心配なこと」の問いに、Bは「進路」についての不安をあげている。一般の日本の生徒であれば、大学受験の仕組みなどに対しておよその知識をもっているが、まずその部分から情報を集めなければならず、どのような道筋で自分の進路を考えていけばいいのかわからない様子であった。また学校側としても、この二人のような生徒の進学問題について今まで対処してきた経験がなく、必要な情報が不足していることも指導の際に障壁となっているものと考えられる。その一方で、二人は学習意欲と理解力を併せ持ち、積極的に自分の進路を切り開こうという意志を持っている生徒である。また二つの文化の架け橋となりうるという、他の日本人の生徒にはない資質も持っている。その意欲や能力、資質を生かす進路指導が今後の課題である。

8 実践例のまとめと考察

二人は二年生になっていっそう学習に励み、様々な場面で活躍を見せている。特にCは日本の学校で学ぶこと自体が初めての経験であり、いわゆる「学校文化」になじむまでには相当とまどいがあったと思われるが、「日本語を母語としない高校生」としては、比較的順調に高校生活に適応している例と言えよう。その要因としては、まず入学初期に指導者同士で話し合いがもたれ共通認識のもとに日本語指導や教科指導をスタートさせることができたということが挙げられる。また日本語指導者は外部講師であったが、教科以外のことについてもよく相談に乗り、指導の内容や気づいた点について毎回記録をして学年団との

意思の疎通を図ったことも成果があったと思われる。そして二人自身に学習意欲や理解力があつたこと、二人とも積極的で前向きな性格であつたことなどが相まって現段階では順調に経過しているといえる。今後は二人の望ましい進路実現に向けての指導が大きな課題となる。

9 全体のまとめと今後の課題

以上、A高等学校の実践例について報告、考察してきたが、ここでは3でまとめた4点のポイントをふまえて整理する。

まず「学習言語」の伸長という点について考える。川上（2003）などで指摘されているように、「生活言語」に大きな問題がみられないことで、「学習言語」の課題が見過ごされることが多々あるものと考えられる。A高等学校では、初期の話し合いの中で「学習言語」の指導の重要性を皆で確認することができ、その後の指導がスムーズに経過したものと思われる。まず指導者側が「学習言語」の伸長という共通の視点に立って指導を行うことが重要である。

次に、教科指導の方法について考える。A高等学校では古典の指導の中で、母語の利用、事前の予習などを行ったが、他教科でも様々な工夫をして二人に指導を行っている。また齋藤（2005）では、「古典の本文を教師が自らテープに録音して生徒に渡す」という他校の指導例がある。このような指導は日本語教育に対する特別な知識がなくとも実践でき、また他の高校や教科においても援用可能であると思われる。現在は各校で個々に工夫されている指導方法について、もっと広く共有化され、検証されることが今後の課題である。

更に、指導者同士の情報の共有については、日本語指導者が外部講師である場合など学校側と連携がとりにくい場合、その一つの手だてとして、A高等学校のように指導記録をやり取りすることなどが考えられる。また、通常「生徒」の指導には、担任、学年団、教科指導者、日本語指導者など様々な立場の者が関わっているが、それぞれの関わり方の違いなどから、その「生徒」の日本語能力を主観的にとらえてしまう可能性がある。前述の「JSLバンドスケール」による測定を通して、「生徒」の日本語能力をより客観的にとらえ、「生徒」の日本語能力とその課題を共通の認識として持つことにより、その「生徒」に必

要な支援を皆で行うことができるものと思われる。

最後に、「進路」については個々の「生徒」や各高等学校の状況によって事情が異なり、それぞれの「生徒」の望ましい進路実現のために、どのような教科指導、日本語指導が必要か、という点については大きな課題と言える。その「生徒」の資質を生かしながらどのように指導を進めていくべきか、今後も考察を深めていきたい。

【注】

- 1 川上 (2003) (2005) など参照。
- 2 川上 (2006) 参照。

【参考文献】

- 川上郁雄 (2003) 「年少者日本語教育における『日本語能力測定』に関する観点と方法」『早稲田日本語教育研究』第2号pp.1-16
- 川上郁雄 (2005) 「JSLバンドスケールを使った言語能力の把握—年少者日本語教育の実践研究として—」『2005年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.143-148
- 川上郁雄 (2006) 「高校レベルのJSL生徒の日本語能力の実態とその背景にあるもの—『JSLバンドスケール』による調査をふまえて—」『2006年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.103-108
- 齋藤昭子 (2004) 「山形県における高等学校レベルの『日本語指導が必要な生徒』の現状と課題」『山形大学日本語教育論集』第6号pp.15-27
- 齋藤昭子 (2005) 「山形県の高等学校における日本語教育の現状について—教科指導との連携のために—」『東北公益文科大学総合研究論集』第9号pp.75-87
- 中島和子 (2003) 「子どもことば日本語 ことばと学力の関係」『月刊日本語』第16巻7号p.56-57
- 文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査」(平成17年度)

【資料】 アンケート用紙

このアンケートは、これからの日本語の学習について考えるためのものです。
答えたくないところは答えなくてもいいです。また、日本語、母語のどちらを使っ
て答えてもかまいません。

日本語の学習について

- (1) 今までどのくらい日本語を学習しましたか。
() 年 () か月くらい
- (2) 日本語で難しいところはどんなところですか。

学校での日本語について

- (1) 先生の話は理解できますか。次の科目についてあてはまるものに○をつけて下
さい。

(1 よくわかる 2 だいたいわかる 3 あまりわからない 4 わからない)

- | | | | |
|---------|---------------------------|-------|---------------------------|
| ・現代文 | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 | ・理科B | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 |
| ・古典 | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 | ・英語 | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 |
| ・数学 | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 | ・家庭総合 | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 |
| ・世界史 | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 | ・保健 | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 |
| ・地理 | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 | ・体育 | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 |
| ・理科A | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 | ・音楽 | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 |
| ・ホームルーム | 1 . . . 2 . . . 3 . . . 4 | | |

- (2) 友達の会話は理解できますか。あてはまるものに○をつけて下さい。

1 よくわかる 2 だいたいわかる 3 あまりわからない 4 わからない

- (3) 自分の意見が日本語で言えますか。あてはまるものに○をつけてください。

1 できる 2 だいたいできる 3 あまりできない 4 できない

- (4) 学校の掲示物やプリントなどは理解できますか。あてはまるものに○をつけて
ください。

1 できる 2 だいたいできる 3 あまりできない 4 できない

- (5) 日本語の学習について質問します。

日本語の時間（水曜日と木曜日）には何を勉強していますか。あてはまるものに
○をつけてください。

現代文 古典 数学 世界史 地理 理科A 理科B 英語 保健 その他

どのような学習をしていますか。(教科書を読む、など)

()

(6) これからも日本語の学習をしたいですか。あてはまるものに○をつけて下さい。

1 したい→(7)へ進む 2 したくない→(8)へ進む

(7) これからはどのような日本語を学習したいですか。あてはまるものに○をつけて下さい。

1 会話 2 文法 3 作文 4 聞き取り 5 教科の学習 6 その他 ()

(8) なぜ学習したくないのですか。理由を書いて下さい。

学校生活について

(1) 学校は楽しいですか。あてはまるものに○をつけて下さい。

1 楽しい 2 ふつう 3 楽しくない(理由は?)

(2) 学校生活について、困っていることや心配なことがあったら書いて下さい。

ありがとうございました。